

## 宗教運動の類型化 2

黒川知文

Tomobumi Kurokawa

(史学教室)

### 序

歴史上、知識階級だけにとどまらず、広く、一般民衆に広がり、特定の宗教思想を基礎とする運動として発展してきたものを「宗教運動」と定義する。本稿において、運動の掲げる思想の内容とその運動の傾向から、宗教運動の類型化を試みたい。

ところで、類型化の試みの基準となる比較研究する方法には、以下の二つがある。すなわち、絶対比較と相対比較である。前者は、すべての可能性から普遍的な比較を試みる方法である。換言すれば、可能な限りの普遍的な型を設定して、比較の作業をしていく方法である。これに対して、後者は、特定の事象に基づいてモデルを立てて、他をそれにあてはめて比較していく方法である。

これらの比較方法には、いずれにも弱点が指摘できる。絶対比較では理論的すぎて、それにあてはまる具体的な事象がないままに作業するという弱点がある。他方、相対比較では、それとは逆に、設定された型にあてはまらない諸事象が捨象される危険性がある。この弱点を克服するには、基本となるモデルが、可能な限り普遍的であることが必要である。

本稿では、相対比較の方法によって、世界史上における宗教運動を類型化する。その際、基本に設定される宗教運動のモデルは、東欧とロシアに展開したユダヤ社会内部における諸宗教運動とする。その理由としては、第1に、東欧とロシアにおいて、ユダヤ社会には、自治権が与えられ、国家的支配からは比較的自由であったこと、その結果、第2に、他と比較して、様々な宗教運動が自由に生じたことがあげられる。

### 1 宗教運動モデル設定

19世紀にいたる東欧とロシアにおいて、展開したユダヤ教の諸宗教運動には、以下の四つのものがある。すなわち、15世紀以来の伝統的ユダヤ教、ハスカラー運動、ムサル運動、ハシディズム運動である。

これらの運動は、互いに影響しあって、時には反発しあって展開した。これらの宗教運動を順に概観して

モデルを設定する。<sup>(1)</sup>

#### ①「支配的儀礼的宗教運動」

伝統的ユダヤ教は、ラビ・ユダヤ教とも呼ばれ、パレスチナにおいて、第二神殿時代に組織されたものである。これは、規範的ユダヤ教であり、AD 70年にエルサレム神殿がローマ帝国軍により破壊されて、全世界に離散したユダヤ人のそれぞれの地域において、さらに、中世から近代にいたるまで存続したユダヤ教である。<sup>(2)</sup>

伝統的ユダヤ教は、トーラーに基づく。トーラーには、モーセに啓示された「書かれた律法」と、それに基づき、後に付加された「口伝律法」とがある。後者は、聖書解釈や実際生活の規定等から成り立ち、5世紀にバビロニアにおいて、タルムードとして集大成された。以後、新たな聖書解釈が追加された。

伝統的ユダヤ教は、第1に、ユダヤ社会を支配する宗教運動である。ラビが指導者として宗教上の諸問題や、さらには社会的諸問題等に関してもトーラー解釈によりその解決にあたった。

伝統的ユダヤ教は、儀礼的でもあった。エルサレム神殿が存在していた時には、様々な礼拝規定に従い、儀式を厳守した。また、第二神殿崩壊以後も、宗教的諸規定を遵守した。安息日規定、食事規定、宗教的祭り規定、宗教的服装規定などを厳しく守った。このように、伝統的ユダヤ教の第2の特徴は、儀礼的なものであったとすることができる。

以上から、伝統的ユダヤ教を、「支配的儀礼的宗教運動」としてのモデルとする。

#### ②「合理的主知的宗教運動」

18世紀に西欧のユダヤ社会において生じた啓蒙主義運動が、ハスカラー運動である。非ユダヤ教文化、とりわけ、キリスト教文化を積極的にユダヤ社会が受け入れるのを目的とする運動である。この運動の創始者であるモーゼス・メンデルスゾーンは、ドイツ系ユダヤ人哲学者であり、教育の改革（キリスト教文化も学ぶ）、政教分離（ユダヤ自治組織の権威否定）、職業の改革（ユダヤ人は農業や手工業に従事する）、宗教の改革（ユダヤ教を民族宗教から、普遍的宗教にする）

を提唱した。

ハスカラー運動は、19世紀初頭には、特に西欧において進展し、ユダヤ人の解放とキリスト教への改宗を推進した。

ハスカラー運動の特徴は、啓蒙主義運動であるため儀礼的宗教ではなく、理性にもとづく合理主義を標榜したところにある。また、トーラー遵守よりも知識や教育を重視した。したがって、「合理的主知的宗教運動」という型になる。

③「復古的倫理的宗教運動」

19世紀後半、東欧のユダヤ教神学院の内部改革運動として生じたのがムサル運動であった。この運動は、個人を厳密に倫理的行動へと促す一種の教育運動であった。具体的には、この運動は個人の倫理や信仰のあり方を強調し、それをハラハー（ユダヤ教法規）の伝統に基礎づけるものであった。内省的に自己を分析して、行為が地域の慣習や世俗の慣習に影響されることなく、トーラーに一致したものにすることを目標とした。換言すれば、ハラハーの伝統により、個人の思考と行動とをユダヤ教化する運動である。

このように、ムサル運動は個人の倫理の改善をめざす運動であったために、「復古的倫理的宗教運動」モデルに設定することができる。

④「神秘的反知性的宗教運動」

ハシディズムは、カバラー神秘思想を理論的根拠として、それに、恍惚感と大衆の熱狂という民衆の伝統とが結合された宗教運動である。密接な社会的結合とカリスマの指導者の存在などが、その社会的宗教的特徴である。

伝統的ユダヤ教が形骸化してしまった状況に、1648年に始まるフメリニツキーによるユダヤ人迫害という危機的状況において生起し、壊滅的打撃を受けたユダヤ共同体を立て直すという役割を果たした。

伝統的ユダヤ教が律法研究と遵守に重きを置くために、学者がユダヤ社会では珍重された。しかしハシディズムはこれに対して、反知性的傾向があり、主に無学な一般民衆の中に広がっていった。

以上より、ハシディズム運動は、「神秘的反知性的宗教運動」モデルに設定することができる。

⑤宗教運動モデルの相互関係

設定された四つの宗教運動モデルの相互関係について考察すると、以下のことが指摘できる。

第1に、「支配的儀礼的宗教運動」に対する反発として生じたのが、「合理的主知的宗教運動」と「神秘的

反知性的宗教運動」である。

第2に、これら新たに生起した二つの宗教運動は、対照的な性格を有している。すなわち、「合理的」に対して「神秘的」、「主知的」に対して「反知性的」なことである。儀礼は、本来、合理的要素と神秘的要素とを有している。換言すれば、知的なものとの感情的なものとの結合が儀礼である。したがって、「合理的主知的宗教運動」と「神秘的反知性的宗教運動」とは宗教運動の両極端に位置するものであり、互いに均衡を保つ関係にあるということが出来る。ただし、両者の生起する状況は対照的なものである。すなわち、「神秘的反知性的宗教運動」は、それをめぐる社会が危機的状況の時に生起する。一方、「合理的主知的宗教運動」は、経済的にも安定した平和な状況において生起する。

第3に、「復古的倫理的宗教運動」は、「支配的儀礼的宗教運動」に回帰するのを希求する運動である。したがって、基本的宗教思想は共通している。そのために、前者が後者にとって代わることは十分ありうるし、併存することも可能である。

第4に、支配のあり方に関して、ヴェーバーの提起した型を適用すれば、「支配的儀礼的宗教運動」は官僚的支配、「合理的主知的宗教運動」は合法的支配、「神秘的反知性的宗教運動」はカリスマ的支配がとられ、「復古的倫理的宗教運動」は準カリスマ的支配がとられている。この考察からも、「復古的倫理的宗教運動」は、「支配的儀礼的宗教運動」とほぼ共通し、それを継承する宗教運動であるということが出来る。<sup>(3)</sup>

第5に、「神秘的反知性的宗教運動」は感情を中心とする運動であり、「合理的主知的運動」は知識を、「復古的倫理的宗教運動」は意志を中心とする運動だとすれば、以下のことが推定される。「支配的儀礼的宗教運動」が形骸化して均衡を崩した時、順境の時には知的な要素が進展し、逆境の中にあっては、感情的要素が強調されて本来の位置に戻そうとする。さらに最終的には、意志が強化されて、本来の運動が刷新されて、そこに戻る。「神秘的反知性的宗教運動」と「合理的主知的宗教運動」と「復古的倫理的宗教運動」とは、このように、感情、知識、意志の力により、形骸化されようとしている「支配的儀礼的宗教運動」を矯正し、存続させる役割を果たしていると言うことができる。

第6に、これらの宗教運動を支える社会階層に注目すると、以下のことが指摘できる。すなわち、「支配的儀礼的宗教運動」の担い手は、上層階級から下層階級にいたるまですべての社会階層に属することがわか



図1 宗教運動モデルの相互関係

る。形式上、すべての国民、もしくは、共同体がこの宗教運動の担い手である。また、それを継承する「復古的倫理的運動」も、知的階層に始まり、中、下層の民衆へと支持者が広がる運動として、展開していく。一方、「神秘的反知性的宗教運動」の担い手は、無学な下層階級が中心となる。また、それとは対照的に、「合理的主知的宗教運動」の担い手は、知的階級を中心とした上層階級に属する者が多くいる。このように諸宗教運動の担い手が属する社会階層に違いがある。

## 2 宗教運動モデルの適用

これら四つの宗教運動モデルは、あくまでも理念型にすぎない。比較のために設定した型であり、実際にはそのままの形で存在しないものである。これらのモデルを歴史順に世界的諸宗教運動に適用する。

### ①古代ユダヤ教

まず、「支配的儀礼的宗教運動」は、古代ユダヤ教団になる。「神秘的反知性的宗教運動」は、バル・コホバ運動にあたる。これは、131年から3年間、パレスチナのユダヤ社会に生じたメシア運動であった。

「合理的主知的宗教運動」は、サドカイ派運動であり、「復古的倫理的宗教運動」は、パリサイ派運動である。これらの運動は、ハスモン国家時代に生起し、サドカイ派はヘレニズムの影響を受け、ユダヤ教の神秘的要素、たとえば、復活の教理や天使の存在を否定した。パリサイ派は、伝統的な神観にたち、復活思想も有し、天使の存在も認める。パリサイ派は、正統的な神学にたちトーラーの研究と遵守を唱え倫理的きよさを求める運動であった。<sup>(4)</sup>

パリサイ派から派生したエッセネ派もまた、倫理的運動であり、生活のきよさを追求した。だがそれは世俗から離れた共同体内部においてであった。

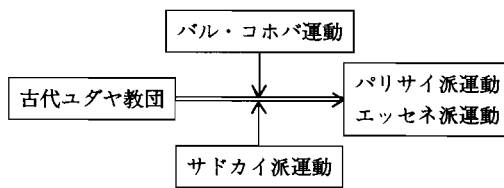


図2 古代ユダヤ教

### ②中世キリスト教

ローマカトリック教会が、「支配的儀礼的宗教運動」であり、全社会階層からの支持者がいた。「神秘的反知性的宗教運動」には、中世末に生起した自由心霊派があてはまる。これは、13世紀末から15世紀にかけて活動し、神との直接霊交を主張する運動であった。神と交わり霊的に自由になった者はもはや罪を犯さない、「完全な人」となり、教会の法に従う必要はないという道徳不要論が説かれた。また、11世紀のフランスに生起したカルトゥジオ会も、神秘思想を有していた。「合理的知性的宗教運動」には、多くの修道会運動が

あてはまる。すなわち、1261年にフランスで創立されたドミニコ会、教会組織や煉獄や聖人崇拜などの聖書に書かれていない教理を否定した12世紀のワルド一派、同時期にドイツとフランスとイタリアに広がったカタリ派、ボヘミアのフス派などがこれにあたる。

一方、「復古的倫理的宗教運動」には、十二使徒の生き方に倣った13世紀イタリアに始まるフランシスコ会、16世紀フランスに結成されたイエズス会があてはまる。<sup>(5)</sup>

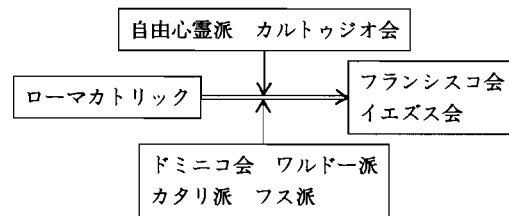


図3 中世キリスト教

### ③近代ユダヤ教

中世において、ユダヤ教は主にスペインにおいて展開した。神秘思想であるカバラーに影響された諸メシア運動は、「神秘的反知性的宗教運動」の典型であった。また、中世最大のユダヤ教学者といわれるマイモニデスの人間理性を重視する合理主義運動は、「合理的主知的宗教運動」としてスペイン系ユダヤ人に広がり、アシュケナズ系神秘主義者との間で論争が行われた。伝統的ユダヤ教は「支配的儀礼的宗教運動」であった。だが、近代になると、正統的ユダヤ教や保守的ユダヤ教に継承されていった。それらは、「復古的倫理的宗教運動」にあたる。<sup>(6)</sup>

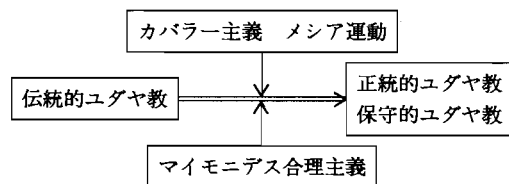


図4 近代ユダヤ教

### ④イスラム教

6世紀末に生起したイスラム教においても、多くの派が活動した。「支配的儀礼的宗教運動」は、イスラムの多数を占めるスンニー派である。「神秘的反知性的宗教運動」には、預言者運動により異端視された12世紀エジプトに生起したアフマディーヤ教団と、17世紀イランに発展したイスファハーン学派と19世紀初頭のイランに広がったシャイヒー派があてはまると考えられる。「合理的主知的宗教運動」には、多くの派があてはまる。9世紀初頭のムータジラ学派、アシュアリー学派、ムータジラ学派の影響を受けた十二イマーム派やザイド派がこれにあたると思われる。<sup>(7)</sup>

「復古的倫理的宗教運動」としては、アラビア半島に、18世紀半ばに生起したイスラム復興運動である

ワッハーブ派があげられる。この派は、神秘的要素を排除して創始者ムハンマドの範例に厳格にもとづくことによりイスラムを活性化しようと試みた。

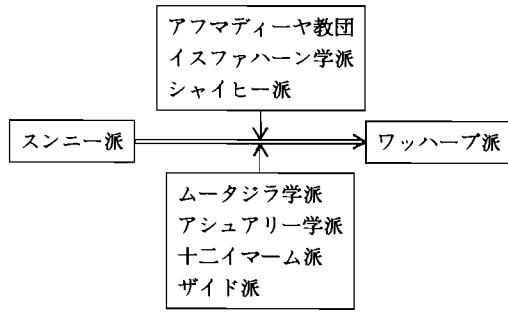


図5 イスラム教

⑤東方キリスト教

1054年に東西教会が分裂して以後、ロシアは、東方キリスト教会の中心地となった。モスクワ総主教が確立して、タタールの侵入にも耐え忍び、ロシア民衆に根付いていった。17世紀のニーコン典礼改革に反対した分離派教徒の運動により分裂し18世紀にはピョートル大帝が宗務院を設立して、教会は政府の管轄下に置かれるようになった。それ以後、様々なセクトが生じた。<sup>(8)</sup>

「支配的儀礼的宗教運動」は、ロシアにおいては、ロシア正教会である。「神秘的反知性的宗教運動」には、18世紀に生じた鞭身教徒や去勢派などの諸セクトがあてはまる。また、「合理的主知的宗教運動」には、同じ世紀に活動したドゥホボール（聖霊否定派）やモロカン派などがあげられる。これらのセクトは、非合理的な宗教規定を否定した。「復古的倫理的宗教運動」としては、古きロシアの典礼とその精神に回帰するのを主張し、政府からの迫害にも耐えて存続している分離派教徒（古儀式派）の運動が指摘できる。

⑥近代プロテスタント教会

16世紀に始まる宗教改革運動は、カトリックに代わる新たなプロテスタント教会を生み出した。その後も様々な宗教運動とセクトが生起していった。<sup>(9)</sup>

まず、「支配的儀礼的宗教運動」は、古プロテスタントとなる。確かにカトリックに比較して儀礼は少なくなったが、洗礼と聖餐式とは、カルヴァンもルターも儀式として遵守するべきものとしているために「儀礼的」な性格の残る運動といえることができる。

「神秘的反知性的宗教運動」には、英国のピューリタン革命の時期に生起して下層民の中に支持者を得た第5王国派、霊的な「内なる光」体験を重んじるクエーカー教徒とシェーカーズ教徒、そして、19世紀末のアメリカで開始された聖霊の直接体験を強調するペンテコステ派運動があてはまる。

「合理的主知的宗教運動」としては、三位一体を否定したユニテリアン運動があげられる。この運動は、17世紀ポーランドで展開したソツツィーニ主義にはじ

まり、18世紀にはイギリスに、そして、19世紀初頭にはアメリカのニューイングランドにおいて広く展開した。現在も影響力を持っている。

「復古的倫理的宗教運動」には、ドイツのシュペーナーやランケに始まった敬虔主義運動があげられる。敬虔主義では、個人と神との内面的関係と実際生活の倫理的改善が求められた。また、フス派の流れをくみ質素な生活と厳格な信仰生活を実践した18世紀のモラビア兄弟団、英国国教会の内部改革運動であるウェスレーを創始者とするメソディスト運動、英国国教会の基本精神に回帰しようとする19世紀のオックスフォード運動もこれにあてはまると考えられる。

また、18世紀から19世紀にかけて二次にわたり展開したアメリカのニューイングランドにおける信仰復興運動も「復古的倫理的宗教運動」であった。

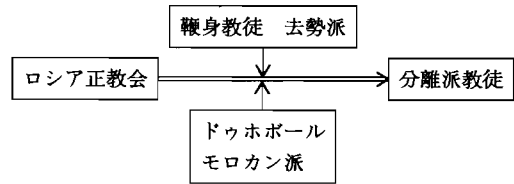


図6 東方キリスト教会

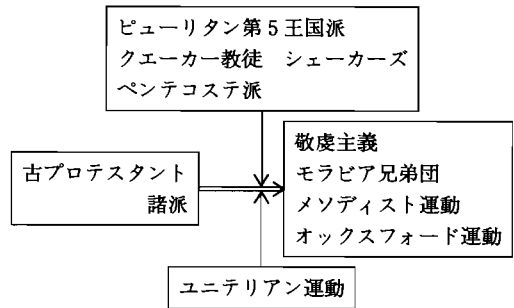


図7 近代プロテスタント

整理と課題

以上の作業から、結論として以下のことが指摘でき。

1. 宗教運動は、その思想と運動の傾向から「支配的儀礼的宗教運動」「神秘的反知性的宗教運動」「合理的主知的宗教運動」「復古的倫理的宗教運動」に分けられる。
2. 「支配的儀礼的宗教運動」が形骸化すると、「神秘的反知性的宗教運動」や「合理的主知的宗教運動」が生起して、影響し合う。そして、「復古的倫理的宗教運動」がさらに生起して、「支配的儀礼的宗教運動」を継承するか、それと併存していく。
3. 以上のことは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教において、古代から近代にかけて展開した宗教運動にあてはまる。

今後の研究課題としては、第1に、諸宗教運動の思想と発生状況について、さらに詳しく分析すること、

第2に、このモデルはユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの一神教の啓示宗教において適用されたが、アジアに生じた仏教や儒教やヒンズー教にも適用できるかどうかを考察すること、があげられる。

### 註

- (1) 拙著『ロシア社会とユダヤ人』ヨルダン社、1996年。を参照。
- (2) 伝統的ユダヤ教に関しては以下を参照。S. サフライ他『絵説ユダヤ人の歴史』新地書房；1974年；石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社、1980年；山我哲雄他『旧約新約時代史』教文館、1992年；ムーサフ＝アンドリーセ『ユダヤ教聖典入門』教文館、1973年。
- (3) ウェーバー、M.、『支配の社会学』I, II, 創文社、1978年、1979年を参照。
- (4) 古代ユダヤ教に関しては、拙著『ユダヤ人迫害史』（教文館、1997年）を参照。
- (5) ドミニコ会に関しては宮本久雄『宗教的言語の可能性』（勁草書房、1992年）、ヒネブッシュ、W. A.、『聖ドミニコの霊性』（サン・パウロ、1995年）、ポアンスキ、M. D.、『聖ドミニコ』（中央出版社、1982年）を参照。フランシスコ会に関しては、

- 川下勝『フランシスカニズムの流れ』（聖母の騎士社、1978年）、エンゲルベール、O.、『アシジの聖フランシスコ』（創文社、1969年）を参照。イエズス会に関しては、ヨゼフ・ロゲンドルフ編『イエズス會』（エンデルレ書店、1958年）、トムソン、F.、『イグナチオとイエズス會』（講談社学術文庫、1990年）、ホアン・カトレット『イエズス会の歴史』（新世社、1991年）を参照。
- (6) 近代ユダヤ教史に関しては、拙著『ユダヤ人迫害史』を参照。
  - (7) イスラム教に関しては、以下を参照。小杉泰『イスラームとは何か』講談社現代新書、1994年；イブン・タイミーヤ『イスラーム政治論』日本サディアラビア協会、1991年；中村廣治郎『イスラーム—思想と歴史』東京大学出版会、1977年。
  - (8) ロシア正教に関しては、森安達也『キリスト教史Ⅲ』（山川出版社、1978年）、オリウィエ・クレマン『東方正教会』（白水社、1977年）を参照。
  - (9) 近代のキリスト教に関しては、以下を参照。レオナルド、E. G.、『プロテスタントの歴史』白水社、1968年；リース、J. H.、『改革派教会の伝統』新教出版社、1989年；半田元夫『イギリス宗教改革の歴史』小峰書店、1967年；山中弘『イギリス・メソディズム研究』ヨルダン社、1990年。
- （平成10年9月11日受理）